

## 2020 年度入学者の学生生活概況：教育文化学科の事例

谷村 英洋

### (要旨)

新型コロナウイルス感染症によって動揺した 2020 年度春に入学してきた教育文化学科 1 年生を対象に、同年度における正課内外の活動状況と意識について記述した。通学日数、履修科目数、成長感、正課外活動等を取り上げ、近くにいっても実はよく分かっていなかった、また前年度までとは多くの点で異なっていた学生生活の概況を具体的に示した。

### (キーワード)

学生生活 オンライン授業 満足度 学生調査 初年次教育 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)

## 1. 背景と課題設定

### 1. 1. COVID-19と学生生活

新型コロナウイルス感染症（以下 COVID-19）の広がりの中で迎えた 2020 年度のスタートから約 1 年半が経過した（2021 年 8 月現在）。本稿では、同年度に帝京大学教育学部教育文化学科に入学した 1 年生がどのような学生生活を送ったのかという点を整理・記録する。その目的は、当該学生たちの卒業までの過程を継続的に確認し、必要な支援や配慮を考えるための一つの参照点を得ることである<sup>1)</sup>。

全国一斉臨時休業が 2020 年 2 月末に通知された初中等の学校からやや遅れて、3 月下旬以降、大学でも卒業式・入学式の中止、授業開始時期の延期など COVID-19 の影響が具体的な形となって表れた。オリンピック・パラリンピックの延期が正式に発表されたのは 3 月 24 日のことで、もともと変則気味に組まれていた学事日程が改めて組み直されていた。4 月 13 日の文部科学省（2020）の発表によれば、4 月 10 日の段階で全国の大学・高専の 85.8% が「授業開始の延期を決定・検討」していた（回答校数 900、回答率約 76.3%）。この間、4 月 7 日に 7 都府県を対象に最初の緊急事態宣言が発出され、4 月 16 日に全都道府県へと対象が拡大された。このような状況下、上記調査によれば回答した大学等の 8 割以上がオンライン授業（同調査の表現では「遠隔授業」「多様なメディアを高度に利用して教室外の学生に対して行う授業」）の実施を決定または検討していた。単に授業開始時期が遅れる、式典・行事がキャンセルされる、キャンパスが閉鎖されるといっ

たことのみではなく、これほど多くの大学教員が短期のうちに一齐にオンライン授業に取り組んだ（取り組まざるを得なかった）という、授業のありようまでが一変した世界的な事態が、まさに未曾有のものであった。

このようにして準備された授業やその他の学生生活全般に、学生たちはどのように向き合い、どのような経験や思いをしていたのだろうか。文部科学省が国立教育政策研究所等と実施した全国調査（大学・高専生約 3000 名を対象に 2021 年 3 月に実施）は、2020 年度後期においてオンライン授業がほとんどまたはすべてだったという学生が 6 割であったこと、オンライン授業に満足している者の割合が過半数であったことなどを発表している（文部科学省 2021）。また全国大学生生活協同組合連合会（2021）は、2020 年 10 月から 11 月にかけて行った調査から、週あたり登校日数の全体平均は 2.0 日であったこと（前年 4.4 日）、1 日あたりの総学習時間（対面とオンラインを合計した授業出席時間＋授業外での予復習時間＋自主学習時間）が 321.1 分で前年度を 27.8 分上回っていたこと、他方で学生生活について「充実している」「まあ充実している」を合わせた割合が 74.2% で前年比 14.6 ポイント減だったことなどを報告している（経年比較ができる 30 大学 11028 名の集計結果に基づく）。

以上のような全国的な状況把握に加えて、個別大学や学部、あるいは授業科目単位の調査・分析が数多く報告されている。具体的には、学生の学習経験を全学レベルで分析するケース、例えば、学生・教員双方に調査を行っている葛城（2021）や、授業担当者が個別授業の分析・実践報告を行うケース、例えば Zoom を使用した必修英語科目の授業過程を詳細に分析した前川（2020）がある。また教育・学習の枠外でも、学生の意識や心身の健康、学生支援、学生相談等に関連して多くの調査・報告が行われている。COVID-19 の影響を受けた正課内外の学生生活の実態を調べ、個別具体的な文脈に照らしてデータを分析し、課題発見や解決に資する含意を導くという実践はおそらくほとんどすべての大学で行われており、今後も増えていくだろう。本稿は学科単位でのまとめという小規模なものだが、このような動向のなかに位置づく。

## 1. 2. 分析課題

平板になるが、正課内外の経験やそれらに関する意識を順に記述していく。分析課題は大きく 3 つに分かれる。第一に、週あたりの登校日数等から学期中の生活パターンを把握する。後述するように、帝京大学ではオンライン授業と対面授業の併行実施が春期中から始まった。また同一科目であっても教員の判断や学生の事情によって、対面で受ける学生とオンラインで受ける学生が混在するケースも生じた。こうなると、仮に履修登録データを用いたとしても、学科内の個々の学生がどの程度キャンパスで過ごしていたのかは分からない<sup>2)</sup>。そこで、学科所属学生の登校日数等を学生の申告に基づいて集計・把握する。

第二の課題は学習経験の記述である。まず履修科目数や学習時間を把握し、次に学習経

験について他年度との比較を行う。先述したオンライン授業と対面授業の併行実施、および実質的な受講形態の多様さは、個々の学生が対面授業とオンライン授業を実際に何科目ずつ履修したのかを分かりにくくする。これを記述するとともに、授業の中での活動経験や成長感を取り上げる。

最後の課題は、学生生活に対する満足度などの意識の記述である。登校日数や科目履修状況、授業経験等の実態を把握することは重要だが、それらの条件下で個々の学生が自分の生活をどのように評価しているかは別途検討が必要である。教育文化学科においても、上で言及した大学生協調査の報告と同様、満足度の低下が生じていたのだろうか。

分析対象は2020年度入学者（1年生）に限定する。いうまでもなく大学での4年間は均質な1年間で単純に積み上げていくものではない。入学から卒業まで、大学という新たな環境への適応、正課内外での学習の深化や期待される役割の移行、進路選択・就職準備等、時間の経過とともに学生の関心や課題は変化する。学生調査データの分析はこのような年次進行の効果を踏まえる必要があるが、限られた紙幅で4学年それぞれを丁寧に検討することは難しい。本稿では、相対的に大きな困難の中にあっただと考えられる1年生を優先して分析し、その結果を記録する。

数多くの報告があるように、COVID-19が学生にもたらした困難の度合いは、友人づくりも、大学での学びもゼロからスタートした1年生と、そうではなかった2年生以上とでは明らかに異なっていた。大学生協調査によると、学生生活が充実している（「充実している」＋「まあ充実している」）と答えた1年生の割合は56.5%で、この値は他の学年と比較すると突出して低い。しかもこれは1983年以降最低の値だという（全国大学生生活協同組合連合会2021）。文科省調査も、友人関係の悩みが1年生で大きいことを明らかにしている（文部科学省2021）。これらの調査結果は、1年生が特段の配慮を要する集団であったという一般的傾向を示唆している。

新入生向けの早期の調査が少なくない中<sup>3)</sup>、本稿の分析はすでに多くの時間が経過した時点での「過去の1年生」の分析だが、教育文化学科2020年度新入生の1年を、先に設定した分析課題に沿って記述していく。なお通学日数と履修科目数など中心的な変数については、学科全体の状況および1年生の相対的な位置づけを明らかにするため他学年の集計結果も報告する。

### 1. 3. 授業実施状況

ここで帝京大学八王子キャンパスにおける同年度の授業実施状況について概要を示しておく。2020年度春期の授業開始日は5月11日となり、すべての授業がオンライン授業として開始された。5月25日に最初の緊急事態宣言が解除された後、6月8日から履修者数が一定数以下の授業や、授業の特性上対面で行われることが特に必要な授業が対面授業に切り替えられた。対面授業への切り替えの可否や出席の可否については、担当教員や学生

の個々の事情も考慮された。対面とオンラインの併用は秋期も同様で、主に履修者数を基準として対面かオンラインかが決定された。

八王子キャンパスのオンライン授業は、講義資料（PDF ファイル）と講義音声ファイルを使用して学習するオンデマンドの形でスタートし、それが基本形であった。春期開始時にこの授業形態に統一されたのは、学生の通信環境の把握や、オンライン授業への学生と教員全般の適応、学内の授業実施環境の増強等が時間を要するためだとされた。教員は4月中からコンテンツ制作に取り組み、春期授業スタートに備えた。スタート後は、上記の授業コンテンツを毎週 LMS（学習管理システム）にアップし、質問は LMS の掲示板機能等を使って受けることとされた<sup>4)</sup>。

対面授業の一部実施が始まった時期にあたる6月上旬からは、動画配信（学外のサーバーを利用）や Zoom 等の活用が正式に開始された。ただし授業の特性上不可欠な場合にのみこれらの方法をとることとされ、いずれも慎重な導入であった。2020 年度のオンライン授業実施を振り返ると、同キャンパスにおける全般的な方針は、同時双方向型をできるだけ推進するといったものではなく、動画配信を行うケースを含めオンデマンド型の授業を基本にするというものであったと考えられる<sup>5)</sup>。とはいえ、時間の経過とともに、また個々の教員の裁量の範囲で、上記の諸方法を柔軟に運用して授業が行われたといえるだろう。秋期も、春期に展開された以上の諸方法でオンライン授業が行われた。

## 2. データ

教育学部 FD 委員会が計画・実施している「学生生活実態調査」のデータを用いる。2020 年度調査は 2020 年 12 月から翌年 1 月にかけて実施された。調査時期が年度後半である点には留意が必要である。春期・秋期の両方について答える質問もあったが、それ以外の質問では調査時点、つまり秋期の後半に関して回答している場合が多い。

実査では印刷した質問紙を用いている。学生への配布と回収は、各学年向けに開設されている必修演習科目の担当教員に依頼した。これは例年と同様の方法である。例外として、キャンパスに来ていない、来られないなどの事情がある学生については、演習担当教員による配布・回収が困難であるため、宛先を確認し FD 委員会が郵送によって配布・回収を行った。なお日本に入国できていない少数の留学生に関しては、郵送調査も断念した。

本稿で分析対象とする教育文化学科の回答者数は、1 年が 69、以下 2 年 63、3 年 70、4 年以上（以下、4 年と表記）71 であった。学科の入学定員 100 名を分母として概算すると、回答した学生の割合は各年次の約 60% から 70% である。学科に所属する全学生の状況や問題・意見等を把握できる調査にはなっていない。

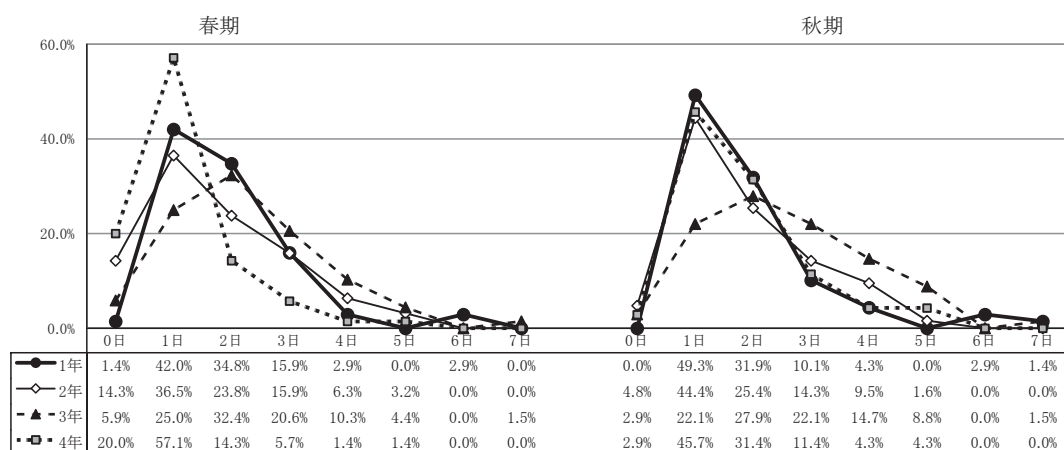
2020 年度の比較対象として 2018 年度と 2019 年度と同調査のデータを使用する。比較できる質問項目が 2019 年度にあればそちらを優先し、ない場合は 2018 年度のものを使用

する。調査時期は両年度とも12月から翌年1月で、回答者数は18年度の1年90、19年度1年77であった。

### 3. 分析

#### 3. 1. 生活のパターン

学期中の登校日数は2020年の調査で初めて調べられた。そのため前年度との比較はできない。「春期（6月中旬以降）と秋期の平均的な登校日数（学期中の週あたり日数）」について実数回答で尋ねている。春期を6月中旬以降としているのは、一部の授業が対面授業に変更された後の状況を回答してもらうためである。全学年の結果を図1に示す。なお以下本稿の分析ではすべて無回答のケースは除外して割合や平均値を集計している。



注：ケース数は春期・秋期いずれも1年69、2年63、3年68、4年70

図1 通学日数（週あたり）

両学期を比較してみると、第一に、最頻値は春も秋も3年以外は1日、3年のみが2日である。具体的なデータの提示は省略するが、3年の教職課程履修者で比較的登校日数が多いことから、3年次配当の教職課程科目で対面授業が多かった可能性がある。第二に、0日の者に注目すると春期は2年と4年で相対的に多いが、秋期にはどの学年でもごく少数になっている。ほとんどの学生が週に1日はキャンパスに来るとというのが秋期の状況であった。結果的に、3年を除く1, 2, 4年の分布は秋期になって似通ったものになっている。

1年に注目すると、春期から週に1日は登校している者がほとんどで、春期に2日登校の者も34.8%と3分の1程度に上る。春期において2日以上登校している者の割合が56.6%というのは3年に次いで多い。しかし秋期になって1年の登校日数がより増えたかというそうではない。春期42.0%だった1日が秋期には49.3%に増加し、春期34.8%だった2日が秋期には31.9%に微減している。秋期の2日以上登校者は50.7%、3日以上

登校者は 18.8% で、4 年と同等かそれを下回っている。1 年全体の傾向として、秋期は春期以上に積極的にキャンパスに通学する、という選択がなされたとはいえない結果、あるいはそれが可能だったとはいえない結果になっている。もちろん秋期になって登校日数が増えた学生もいる。図表は示さないが春期と秋期の登校日数をクロスさせると、秋期に増えた者は 1 年全体の 20.3%、同じ日数だった者は 53.6%、減った者は 26.1% で、増えた者とほぼ同数の学生が登校日数を減らしていたのである<sup>6)</sup>。なお登校日数の平均値は春期も秋期も同じ 1.9 日で、これは大学生協調査の全体平均 2.0 日とほぼ同じだが、1 都 3 県に限定した平均値 1.2 日は上回っている（全国大学生生活協同組合連合会 2021）。

生活パターンの大枠を見たので、正課外の活動を確認しておく。調査時点（秋期の後半）のサークル・部活とアルバイト・仕事の状況を、2019 年度と対比させて示した（表 1）。サークル・部活をしているという行為者の割合（回答者全体に占める割合）は前年度より 10 ポイント強少ない。キャンパスに来る日が極端に少ない中では加入や活動の機会は制限されてしまわざるを得ない。しかし、行為者だけを対象に概算した週あたり活動時間の平均は 7 時間 6 分で、前年度の 5 時間 10 分を上回っている<sup>7)</sup>。例年であれば比較的活動時間が短いライトな活動をする層の数が抑制され、結果的に行為者に占める運動部所属者の割合が高くなっていることが一因だと考えられる（表にはないが行為者に占める運動部所属者の割合は 2020 年 48.1%、2019 年 30.0%）。行為者の満足度も 2020 年は「とても満足している」の割合が明らかに少なく、「まあ満足している」が多くなっている。活動はできていても COVID-19 の影響で何らかの規制が伴う、オフの時間の交流も制限されるといった事情が影響していると思われる。アルバイト・仕事でも行為者率は下がっているものの、約 7 割が行っている。週あたりの時間<sup>8)</sup>は 14 時間 45 分で前年より短く、平均月収も 6404 円下がっている。

表 1 正課外の活動状況

	年度	行為者率 （「している」者） % (n)	週あたり時間 （行為者平均） 時間：分	満足度 (%)				合計	月収 平均(円)
				とても満足し ている	まあ満足して いる	あまり満足し ていない	まったく満足 していない		
サークル・部活	2020	39.7 (27)	7:06	15.4	50.0	26.9	7.7	100.0	
	2019	53.3 (51)	5:10	39.5	26.3	31.6	2.6	100.0	
アルバイト・仕事	2020	73.9 (40)	14:45					60809	
	2019	80.5 (62)	16:32					67213	

### 3. 2. 学習

#### 3. 2. 1. 授業形態別にみた履修科目数と学習時間

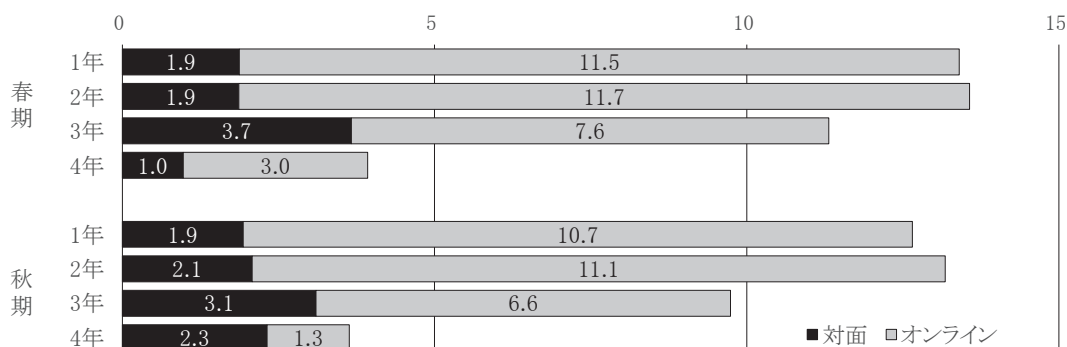
学生生活における学習の部分にフォーカスしていこう。1.3. で述べたように、オンライン授業と対面授業の併行実施や個々の教員の授業デザインの多様化によって、学生の学習経験は複雑化し把握しづらいものになっている。否応なく急変する教育方法・学習経験に

対し、それを把握するための汎用的な枠組みや測定方法を欠いた状況といえる<sup>9)</sup>。学部・学科の学生がどのように学んでいるのか、これまで以上に分からない状況になりつつある。

暫定的な方法として2020年度の学生生活実態調査では、春期（一部で対面授業が始まった6月以降）と秋期の両方について、オンライン授業と対面授業をそれぞれ何科目履修したか、さらにそれを卒業要件単位にカウントされる科目（要件内）とされない科目（要件外）<sup>10)</sup>に分けて回答してもらうという質問を設けた。ただいくつも限界がある。第一にオンライン授業と対面授業の区別の問題があるが、これは「オンライン主体」か、「対面主体」か、という点を学生に判断してもらった。今後もし、隔週でオンライン授業が行われたり、毎回授業外学習用に動画等のオンライン教材が提供されたりするようになれば同じ方法はとれないだろう。しかし現段階では許容できる方法だろうと判断した。第二に、オンライン授業がLMSを活用したオンデマンド授業なのか、Zoom等を用いた同時双方向型の授業なのかは判別できない。前者が基本とされていたことと、両者を分けて回答する際の負荷が高すぎることから、「オンライン主体の授業」としか表記しなかった。しかしそれでも回答の負荷は高かったようで、部分的な無回答が多く発生した。これが第三の問題である。本稿では、春期・秋期それぞれで無回答の欄が全くなかったケースのみを集計対象とした<sup>11)</sup>。以下で示す分析結果でケース数が少なくなっているのはそのためである。このような限界をはらんだデータであることを明記しておきたい。

授業形態別の履修科目数の平均値を図2に示した。卒業要件内かどうかは問わず、授業形態だけで科目を分け、学年別に集計している。学年によって履修科目の総量が異なるが、対面授業の科目数の平均は、最低で1.9（1、2年春、1年秋）、最高で3.7（3年春）である。登校日数が多かった3年はやはり対面授業を比較的多く履修する傾向にあった。

1年に注目すると、2年と似た値を示しており、1年だけが特異な構成になっているということはない。春秋共に平均13科目程度を履修し、そのうち対面は2科目程度である。端的に言って、1年間を通してオンライン授業中心の学習を行っていたということである。



注：ケース数は春期の1年から順に47、37、51、41、秋期同46、39、50、41

図2 2020年度の平均履修科目数（学年・授業形態別）

では要件内か要件外かを区別してみるとどうだろうか。図2と同じデータを使って、1年の履修科目数の平均値を要件内・要件外と授業形態で区分して示した(表2)。先に要件外を確認すると、春期の要件外・計は1.6科目、秋期の要件外・計は0.7科目となっている。そもそものべき科目の数が多くはなく、春期のうちに多めに取る傾向があるため秋期は平均値が1を下回っている。その内訳から春期・秋期共に、要件外の科目の授業を対面で受けた学生は少なかったことが分かる。

残る要件内の科目は春期も秋期も平均値に大きな違いがない。確かに細かく見ていけば、この表にはないが要件内・対面の最大値が秋期になって上がっているといった変化は起こっているが、全体的な動きではない。要件外の科目を除き要件内の科目に限ってみても、秋期に入って対面授業がより多く履修されるようになったという大きな変化は生じていなかったことが確認された。

表2 1年生の履修科目構成と学習時間(平均)

	春期の履修科目数						秋期の履修科目数						秋期の学習時間(週あたり概算、時間:分)			総学習時間
	要件内			要件外			要件内			要件外			対面授業主体の科目の授業出席、課題、準備・復習	オンライン授業主体の科目の受講、課題、準備・復習	自主的な学習・読書(教員採用試験の勉強含む)	
	対面	オンライン	計	対面	オンライン	計	対面	オンライン	計	対面	オンライン	計				
平均	1.6	10.2	11.8	0.3	1.4	1.6	1.8	10.1	11.9	0.1	0.6	0.7	4:44	16:22	3:47	24:34
n	47	47	47	47	47	47	46	46	46	46	46	46	69	68	67	67

さて、表2には学習状況の指標として学習時間の平均値も示している<sup>12)</sup>。対面授業とオンライン授業の併用によって、学習時間の調査も難しくなった。特にオンデマンド型オンライン授業の場合、授業内学習と授業外学習の境界があいまいである。教室での90分の外側で行われる予復習や課題への取り組みを正課の授業外学習と定義し、それに費やされた時間を調べていた従来のやり方が適用できない状況が生じている。

2020年度の学生生活実態調査では、「対面授業主体の科目の授業出席、課題、準備・復習」というワーディングによって対面授業に関わる全ての学習の時間を、「オンライン授業主体の科目の受講、課題、準備・復習」でオンライン授業に関わる全ての学習の時間を聞こうと試みた。以下、前者を対面授業学習、後者をオンライン授業学習と呼ぶ。学生の身になって考えれば、上記の文言を読み、頭の中で計算を試み、8つの選択肢から回答を選び出すという作業の負荷は非常に高い。こちらが意図した通りの妥当性の高い回答が引き出せているかという検討課題は残されているが、ここでその平均値に触れておく。

対面授業学習の平均時間は4時間44分、オンライン授業学習は16時間22分であった。これらは正課の学習時間ということになる。これに自主的学習時間を加えた、3種類の学習時間の合計(総学習時間)の平均値は24時間34分であった。

ここで正課の2種類の学習時間についてももう少し検討してみたい。学生は平均して1科目あたりどの程度の時間を使ったのだろうか。平均学習時間を平均履修科目数で割って概



算したいが注意が必要である。履修科目数（秋期）は上述の事情により有効回答が46と少なく、回答者のほとんどが答えた学習時間の有効回答数との差が大きい（表2）。このような限界を指摘した上で便宜的に図2の科目数の値を使って概算すると、対面授業学習週4時間44分を秋期の対面科目数1.9で割ると1科目あたり約2時間29分となる。対面授業であるからこのうち90分が授業出席時間、残り59分が従来型の授業外学習時間となる。オンライン授業学習の時間も同様に計算すると、週16時間22分を10.7（科目）で割ると1科目あたりでは約92分となる。1科目あたりの時間が対面授業とオンライン授業では大きく異なるという概算結果である。

最後に2019年度と2020年度の正課の総学習時間を概算し比較してみたい。2019年度調査では授業外学習時間として「授業の課題、準備・復習」の時間が調べられており、最頻値は「1～5時間」（74.0%）、平均値は4時間6分であった（図表無し）。2019年度調査では履修科目数や授業出席時間が調べられていないので2020年度秋期の総履修科目数の平均値12.6科目（＝対面1.9＋オンライン10.7、図2）を使う。これは履修制限の上限とほぼ同等の履修科目数である。これに90分をかけると18時間53分となる。この推定授業出席時間18時間53分と授業外学習時間4時間6分の合計22時間59分が2019年における平均的な正課の総学習時間である<sup>13)</sup>。他方、2020年の正課の総学習時間は、4時間44分（対面授業学習時間）と16時間22分（オンライン授業学習時間）の合計なので21時間6分となる。両年度を比較すると、22時間59分（2019年）→21時間6分（2020年）という結果である。2020年の方が約2時間短いという違いはあるものの、2019年度の計算では、実際にはあり得ない平均出席率100%を仮定しているため、この概算結果の差を確定的にとらえることはできない。ここでは概算の結果として、両年度の学習時間の量がまったく釣り合わないものではなかったことを確認できたことが発見である。

ただし、その時間の多くを使って、一方は教室の中で学び、もう一方は教室の外で一おそらく多くの場合一人で一学んだ。時間の量は釣り合っても、その時間を使って行った学習の様式はきわめて対照的である。その優劣ではなくその異質さを、上記の学習時間の内訳から改めて認識することができる。2020年度の学生は、教員の経験と理解を超えた時間を過ごしていたといえるだろう。

### 3. 2. 2. 授業経験と成長感

オンライン授業がここまで増えた2020年度において、授業のなかで経験する教育方法や、授業から生じた学習成果は前年度までとどのように異なるのだろうか。本来周到に検討すべき問いではあるが、使用できるデータは限られている。教育方法については、いわゆる「アクティブラーニング」の称揚を受けて、プレゼンテーションやグループワークの経験量が2018年度に調べられている。1年間に履修した科目（ただし必修演習科目は除く）について、「以下に示すような活動・内容を含む授業科目はどれくらいありました

か。履修科目数全体に占めるおおよその割合で答えてください。(以下略)」と尋ねている。

容易に想像がつくように、これらの教育方法の経験は2018年度と比較して明らかに少なくなっていた(表3)。2020年度もプレゼンテーションとグループワークの両方で最頻値はかろうじて「1～3割」であるが、「なかった」の割合が2020年度は明らかに高い。グループワークについて2018年度は「なかった」はほとんどいない。すなわちほぼすべての学生がいずれかの科目でグループワークを経験していたが、2020年度は「なかった」が39.7%にのぼり、約4割がグループワークのある授業を全く経験していない(必修演習は除く)。背景として、オンライン授業の基本型がオンデマンド授業であったこと、対面授業であっても感染防止の観点から会話を伴う方法は取りづらかったことがあるだろう。

表3 春期・秋期に履修した科目の教育方法(%)

		なかった	1～3割の科目	4～6割の科目	7割以上の科目	合計	(n)
プレゼンテーション(模擬授業を除く)をする機会がある	2020年	47.1	50.0	2.9	0.0	100.0	(68)
	2018年	14.6	64.0	16.9	4.5	100.0	(89)
グループワークなど学生同士で意見交換をする活動がある	2020年	39.7	50.0	7.4	2.9	100.0	(68)
	2018年	2.2	40.0	38.9	18.9	100.0	(90)

では成長感についてはどうだろうか。汎用的技能、英語力、学びの実感などに分類できる9項目について2019年と2020年で比較ができる。表4は「入学時からこれまでの教育学部での学びを通じて、以下のような力を身につけたと思いますか」と尋ねた結果である。「とても身についた」と「まあ身についた」を合わせて肯定回答とし、その割合の降順で項目を並べている<sup>14)</sup>。

この結果から読み取れる点を3つ挙げれば、第一に、2019年との比較において全般的な落ち込みは見られない。「とても身についた」と肯定回答の割合の差を示しているが、マイナスになっている項目はごく少数である。第二に、読む力、書く力において2019年よりも評価が高い。「とても身についた」や肯定回答の差が+10ポイント程度に上るものとして「文章を要約する力」「論理的な文章をまとめる力」「批判的読書をする力」が挙げられる。オンデマンド型オンライン授業を通じた学習の中で、ただ聞くだけでなく、読む・書く課題に多く取り組んだことが影響している可能性がある。第三に、口頭でのコミュニケーションに関する項目では、2019年と比較して肯定的な評価の割合が下がっている。具体的には「人の前で分かりやすく説明する力」と「発表者に対して質問をつくる力」で、肯定回答の割合がそれぞれ13.5ポイント減、6.0ポイント減で、それ以外の項目が昨年度並みかそれ以上の評価結果になっているのと対照的である。両項目とも「とても身についた」と評価する割合はやや増えたものの、「まあ身についた」の割合が下がり、否定的回答の割合が上がっている。背景にはやはり発表やディスカッション、グループワークなど、学術的・論理的な会話を介した学びの機会が少なかったという事情があると推測される。

いずれも主観的評価の結果である点に留意すべきだが、多くの項目で前年度並みかそれ

以上の成長感が確保されていることは悪いことではない。2020年度の授業形態や教育方法の影響がうかがえる点にも注意したい。継続的に適宜直接評価も用いながら学習成果の確認を行い、学科教員とその教育実践にフィードバックしていくことが期待される。

表4 学習成果の自己評価 (%)

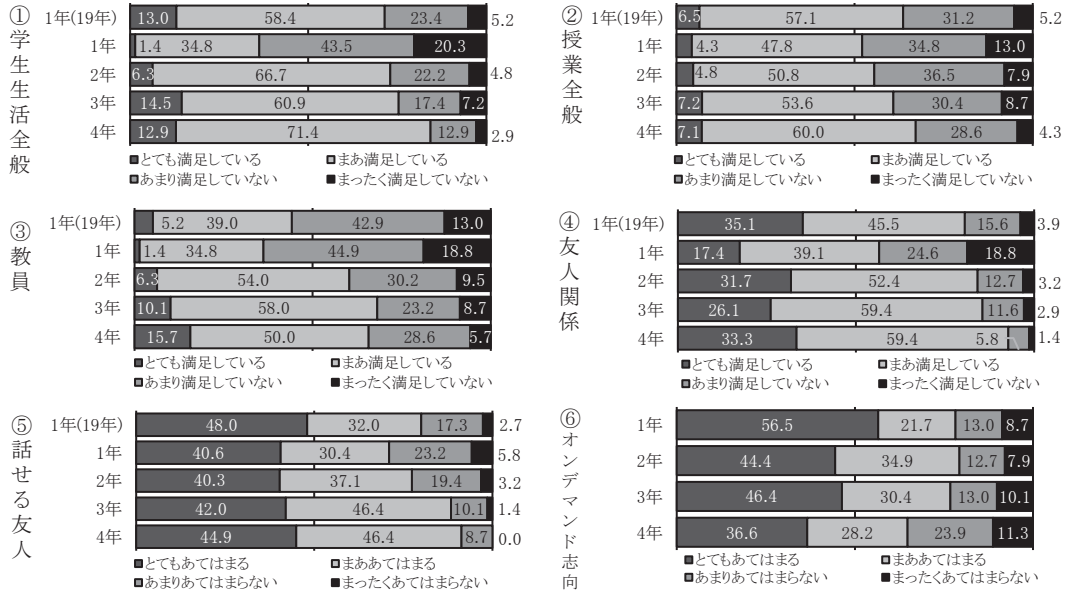
	年度					合計(n)	肯定回答 (とても+まあ)	「とても身についた」 (%)の差 (20年-19年)	肯定回答(%)の差 (20年-19年)
		とても身についた	まあ身についた	あまり身につかない	まったく身につかない				
発表のための資料をまとめる力	2020	17.4	63.8	17.4	1.4	100.0(69)	81.2	3.1	1.9
	2019	14.3	64.9	19.5	1.3	100.0(77)			
学問のおもしろさを感じること	2020	26.1	49.3	21.7	2.9	100.0(69)	75.4	5.3	6.5
	2019	20.8	48.1	26.0	5.2	100.0(77)			
文献を要約する力	2020	13.2	57.4	26.5	2.9	100.0(68)	70.6	11.9	8.3
	2019	1.3	61.0	36.4	1.3	100.0(77)			
論理的な文章をまとめる力	2020	11.6	58.0	29.0	1.4	100.0(69)	69.6	6.4	15.0
	2019	5.2	49.4	44.2	1.3	100.0(77)			
批判的読書をする力	2020	21.7	46.4	29.0	2.9	100.0(69)	68.1	13.9	7.1
	2019	7.8	53.2	36.4	2.6	100.0(77)			
大学でこれを読んだと自信を持って いえるもの	2020	24.6	39.1	33.3	2.9	100.0(69)	63.8	6.5	9.2
	2019	18.2	36.4	37.7	7.8	100.0(77)			
人の前でわかりやすく説明する力	2020	15.9	42.0	39.1	2.9	100.0(69)	68.0	6.9	-13.5
	2019	9.1	62.3	26.0	2.6	100.0(77)			
英語の基礎的能力	2020	10.1	34.8	43.5	11.6	100.0(69)	44.9	5.0	0.8
	2019	5.2	39.0	41.6	14.3	100.0(77)			
発表者に対して質問をつくる力	2020	11.6	30.4	50.7	7.2	100.0(69)	42.0	5.1	-6.0
	2019	6.5	41.6	49.4	2.6	100.0(77)			

### 3. 3. 学生生活満足度

最後に満足度をはじめとする学生の意識を確認する。2年以上との比較および前年度の1年との比較を交えながら、2020年度入学者の結果をみていく(図3)。**①**から**④**は各種満足度で、なかでも**①**全般的な満足度が低く、「とても満足」(1.4%)「まあ満足」(34.8%)を合わせても36.2%で半数に満たない。同じ年度を経験した2年以上より明らかに低く、前年度の1年との差も大きい。ちなみに2019年の1年は2020年度は2年になっている。完全に同一人物のみで構成されているわけではないが、1年(19年)と2年の分布に大きな差があるわけではない。大学初年次に学生生活の土台をつくった後であれば、2020年度の経験を経ても満足度は維持され得たということである。そのような土台なしに、本来その土台をつくるはずのタイミングで2020年度を迎えた1年生にとって、苦勞の多い1年だったことをこの結果は物語る。

授業全般の満足度(**②**)は学年間の差が小さく、学年が上であるほど満足度が少しずつ高くなっている。1年は「とても満足」6.5%、「まあ満足」47.8%の肯定回答と、「あまり満足していない」34.8%、「まったく満足していない」13.0%の否定回答で全体が二分され、前年度の1年よりは否定的な者が多い。

**③**と**④**は人間関係である。**③**教員は、1年で「とても満足」1.4%、「まあ満足」34.8%で肯定回答が少ない。これは1年(19年)と比べてもやや少ない。しかし、1年(19年)と2年を比べると2年で肯定回答が増えている。学年が上がるにつれ関わる教員の数や関わりが変化していく可能性が示唆されている。**④**の友人関係は1年が際立って満足度が低い。否定回答が43.4%に上り、これは前年の1年と比べても、2年以上と比べても高



注：質問紙上では②「大学の授業全般」、③「教員との接触」、⑤「様々なことを話せる友人が大学にいる」、⑥「オンライン授業は、ZOOM等を使ったリアルタイム型よりも、好きな時間に受講できるオンデマンド型がよいと思う」。ケース数は①～③は1年（19年）77、1年69、2年63、3年69、4年70、④同77、69、63、69、69、⑤同75、69、62、69、69、⑥1年から順に69、63、69、71

図3 学生生活に関する意識 (%)

い割合である。友人関係については、満足度とは別の質問も行っている。⑤は「様々なことを話せる友人が大学にいる」についての回答で、1年（19年）と比べると1年の否定回答は9ポイントほど高い（1年（19年）20.0%、1年29.0%）。しかし、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を加えた約7割が学内で友人関係を形成できていることも示している。それでも不満感が強い（④）のは、人と知り合う機会、友人ができるような機会の制限に加え、通常ならその先にあったはずの、諸経験を通して関係を深めるというフェーズにおいても様々な制限があったからだと考えられる。

最後に学習関連の意識に触れておく。2020年度入学者が経験したオンライン授業は既述の通りオンデマンド型を主軸としていた。1年間の学習経験を経て学生はオンデマンド型をどう評価しているのか。「オンライン授業は、ZOOM等を使ったリアルタイム型よりも、好きな時間に受講できるオンデマンド型がよいと思う」というワーディングで、リアルタイム型（同時双方向型）とオンデマンド型を比較させる形で尋ねると、過半数の学生が後者を支持していた（⑥オンデマンド志向）。しかも1年は「とてもあてはまる」が56.5%で最も多い。この結果だけをみれば「もっと同時双方向型を」という希望はどれも少数派であること、多数派がオンデマンド型の長所を認めていることが分かる。

しかしこれだけで、また学生が評価しているというだけで、即オンデマンド型がよい、という結論にはならない。なぜなら第一に両型の長所や対照的な点は「好きな時間に受講

できる」かどうか、だけではない。この質問はその点のみを判断基準としておりやや誘導的でもある。第二に、同時双方向型の経験が少ないということはその長所や目的が学生にはよく理解されていない可能性がある。第三に、本来は全ての授業をどちらかの型にするのではなく、科目の特性によって使い分けるのが合理的である。

表4の結果はオンデマンド型の長所となり得る特性を示唆していた。また自宅・キャンパス間の移動が発生する対面・オンライン併行実施下においては、オンデマンド型が学びやすいという面もあっただろう。学生がオンデマンド型のメリットを認めていたという点は、教育を計画・実践する側への一つのフィードバックである。今後、2019年以前の大学教育の状態に完全に戻るのでなければ、オンライン授業の様々な形での活用は避けられない。満足度や学習成果という点で学生と教員が納得できる活用の形を模索していくほかない。

#### 4. まとめ

教育文化学科2020年度入学者の平均像からは、少ない通学日数のなか、大部分の科目をオンラインで受講し、例年と同等の時間を使って学習を重ねた姿が浮かび上がってきた。サークルなどの正課外活動に参加する学生はやや減少し、活動参加者の満足度は低下していた。大学での人間関係に対する満足度も前年度を下回るものだった。一般に指摘されていることの確認であったとしても、手持ちの情報をもとに、実際に接している学生の状況として知ることには意義がある。本稿執筆時点からさかのぼるが、2021年4月には、FD委員会の活動によって本稿の内容の一部は学部内で共有され、それも踏まえ当該年度の教育や学生指導がスタートした。本稿では、引き続き2020年度入学者の生活や変化、成長、課題等を把握・評価する一つの参照点となるべく追加の分析を行った。

以下、実践上、分析上の課題を簡潔に述べる。一つは人間関係の形成に関する課題である。対象学生の友人関係や教員との関係がその後の時間の経過の中でどのように変化していくのか、継続的に確認したい。2020年度は、教育文化学科の学科行事である新入生交流会を中止し、代替的なイベントも行えなかった。当時の状況を考えればやむを得ず、このことだけが不満足の原因であるはずはないが、同期生や先輩、教職員と関わる一つ一つの機会の重要性を再認識すべきだろう。COVID-19の影響が依然続く2021年度以降の入学者に対しても配慮が必要である。

二つ目は3.2.で記述した満足度に関して、本稿では満足度の分布の確認に終始し、その背後要因や相互関係は検討できなかった。学生生活全般満足度の低下は特にどのような経験あるいは機会の喪失が理由になっているのか、授業満足度を二分する要因は何かといった疑問がわいてくる。

最後は学習である。オンデマンド型オンライン授業中心の学びは、従来とは異なる成長感をもたらした<sup>15)</sup>。前年度までと異なる質の学習が行われたことは間違いない。しかし

年度が変わり入学者が違っても、オンライン授業の成果として同じ傾向が確認されるのか、また主観的成長のみならず客観的な知識・技能の伸長が認められるのか等の検討課題がある。さらに、本稿では汎用的技能を中心に検討したが、その検討の幅を広げることも必要だろう。

## 注

- 1) 本稿は教育学部の2021年度第1回FD研究会(2021年4月19日開催)で行った報告「新型コロナ元年の学生生活：自己点検・自己評価項目の結果と、1年生の経験・意識を中心に」の一部を再構成し、新たな分析を加えて執筆したものである。
- 2) 適切な手順を踏んで出席管理システム等のデータを用いれば判明するのかもしれないし、すでに解析されているのかもしれないが、少なくとも個別学科や一般教員ができることではない。
- 3) 新入生に特段の配慮が必要であるという認識に基づく早期の実践の一事例として平野ほか(2021)がある。平野らは、UPI(University Personality Inventory)という尺度で新入生の精神的健康度を授業開始前の5月に調査し、その結果を授業開始後の面談での活用や学生支援方策の検討につなげている。このような調査は、新入生が新入生であるうちに実施され、即各種支援や教育改善の検討にまでつなげ得るという機動性を有していた。
- 4) 私学高等教育研究所が日本私立大学協会加盟校を対象に行った調査(2020年7~8月実施、回答校数309)では、オンライン授業実施校に具体的方法を複数回答で聞いている(宮里2020)。八王子キャンパスで基本とされた講義音声ファイルを用いる方法(「オンデマンド型授業(音声配信)」)の実施率は44.6%で比較的少なかったようである。その他の方法は「同時双方向型授業」94.9%、「オンデマンド型授業(動画配信)」86.2%、「資料提示型授業」69.9%であった。
- 5) 帝京大学高等教育開発センター(2021)が実施した「秋期オンライン授業に関する調査」では、オンライン授業を実施した科目について「双方向型(ZOOM等)の授業」が何回実施されたか尋ねている。「すべて」という回答の割合は7.6%、「実施せず」は86.1%であった。これは、個々の学生が履修している科目それぞれについて回答したものを合算した結果のため、「86.1%のオンライン科目で実施されていない」ということではない。しかしそうであっても、このデータは学生たちが経験していたオンライン授業の多くが非双方向型、非同期型であったことを明瞭に示唆している。
- 6) 春期よりも登校日数が減っているという状況について会話した際、偶然やカリキュラムの都合ではなく「自分も周囲も意図的に減らしている」と教えてくれた学生がいた。ごく一部の対面授業のためだけに頻りにキャンパスにくるのはコストばかりかかるし、オンラインで受けざるを得ないたくさんの方の授業を滞りなくこなす上で不都合でもある。なにより移動を控えたいという事情もある。これだけで一般化はできないが、少なくとも一部の学生にとって、通学日数・通学時間の圧縮は春期の学生生活の経験を経てなされた合理的な選択の結果だったのである。
- 7) 生活時間については、秋期の典型的な1週間について週あたりの合計時間を尋ねている。回答は「0時間」「1~5時間」「6~10時間」「11~15時間」「16~20時間」「21~25時間」「26~30時間」「31時間以上」の8カテゴリーからの選択である。サークル・部活、アルバイト・仕事、各種学習時間の平均値は、各カテゴリーに下から0、3、8、13、18、23、28、33をあてて概算している。
- 8) アルバイト・仕事の平均時間の概算方法については注7)参照。
- 9) 「ラーニングアナリティクス」や「データサイエンス」の専門家の力を借りれば、状況は違っ

で見えるのかもしれない。

- 10) 教職課程等の一部科目で修得した単位は、卒業要件単位に含むことができず、また履修上限単位数による制限の対象にもならない。これらを本稿では「要件外」(の科目)と呼ぶ。
- 11) 加えて、各学期について便宜的に、要件内の合計科目数が15科目を超えるケース、または要件外の合計科目数が5科目を超えるケースの回答は無効とし分析の対象から除外した。
- 12) 各学習時間の平均値の概算方法については注7) 参照。
- 13) 国研が行った全国調査(2016年)では、正課総学習時間の1年生全体平均値は24時間54分(授業出席20時間00分、授業の予習・復習など4時間54分)であった(濱中2018)。
- 14) 表3で見たように授業で発表する機会は少なかったはずだが、「発表のための資料をまとめる力」が最上位に来ている(ただし2019年より大幅に好転しているわけではない)。グループ・プロジェクトの発表に1学期間かけて取り組んだ必修科目のライフデザイン演習内で学生生活実態調査を実施している影響があるかもしれない。なおこの項目は「発表」の語を含むが、評価しているのは資料作成の力であって、口頭でのコミュニケーションの力ではない。
- 15) 授業のオンライン化によって、高まった成長感とその逆だった成長感があることは他大学でも指摘されている(村上2021)。

## 引用文献

- 葛城浩一(2021)「コロナ禍における学生の学習活動及び教員の教育活動の実態」『香川大学教育研究』18:77-90.
- 全国大学生生活協同組合連合会(2021)「第56回学生生活実態調査の概要報告」  
<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (閲覧日:2021.8.31)
- 帝京大学高等教育開発センター(2021)「秋期オンライン授業に関する調査結果のご報告」  
<https://ctl.teikyo.jp/fd/others/online-research/> (閲覧日:2021.8.31)
- 濱中義隆(2018)「平成28年度大学生等の学習状況に関する調査研究:結果の概要(大学昼間部)」国立教育政策研究所『学生の成長を支える教育学習環境に関する調査研究』293-327.
- 平野正広・荒井沙織・武内朗・源裕介・橋本和幸・盆子原秀三(2021)「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)による緊急事態宣言下の外出自粛期間中における授業開始前の大学新入学生の精神的健康度」『了徳寺大学研究紀要』15:153-166.
- 前川洋子(2020)「コロナ禍における学生の参加を促す双方向性Zoom授業の実践」『岡山理科大学教育実践研究』4:139-150.
- 宮里翔大(2020)「規模別にみた新型コロナウイルス感染症が大学の教学面に与えた影響」日本私立大学協会附置私学高等教育研究所『コロナ禍の私立大学』:33-40. <https://www.shidaikyo.or.jp/riihe/book/5141cdec074a1afe0b8a693c935936f95b5e92ed.pdf> (閲覧日:2021.8.31)
- 村上正行(2021)「探究心や学問の興味が深まった オンライン授業の意外な効果」『先端教育』4月号. <https://www.sentankyo.jp/articles/ef7bc00f-b82c-4741-9105-0f8f5fb02ccf> (閲覧日:2021.8.31)
- 文部科学省(2020)「新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について」  
[https://www.mext.go.jp/content/20200413-mxt\\_kouhou01-000004520\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200413-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf) (閲覧日:2021.8.31)
- 文部科学省(2021)「資料 新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けた学生等の学生生活に関する調査等の結果について」『週刊教育資料』1614:19-32.